

ESD レポート

Education for Sustainable Development

2005 冬

vol.6

ESDとは「持続可能な開発のための教育= Education for Sustainable Development」の略。社会、環境、経済、文化の視点から、人類が直面するさまざまな課題に取り組み、公正で豊かな未来をつくる「持続可能な開発」——それを実現する力を、世界各地に生きる私たち一人ひとりが学び育むことをめざして、「国連持続可能な開発のための教育の10年（ESDの10年）」が、2005年からスタートしています。

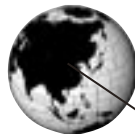


2005年12月10日発行

NPO 法人
「持続可能な開発のための
教育の10年」推進会議



特集



アジア発 ESD

目次

特集 アジア発 ESD

韓国	2
インドネシア	3
地域の動き	4
国際的な動き	4
DESJ日本実施計画最前線	5
ESD とつながろう	
林野庁発 木づかい運動	6
ESD に期待します!	6
私が ESD-J に入ったわけ	6
ESD を知ろう	
ESD 基本用語集	7
ESD 関連の本	7
ESD-J だより	8

ESDの10年は、国連が提唱している国際キャンペーン。世界のさまざまな国・さまざまな地域が、固有の風土や経済・社会・文化などを背景に、独自のESDを創っていかようとしています。世界ではどんな実践が行われているのだろうか？2005年夏、ESD-Jはアジア諸国のESDの状況を視察する機会に恵まれました。韓国の都市とインドネシアの農村、それぞれの訪問先で発見した「地域発ESD」をご紹介します。

📷 ジャワ島西部のグヌン・ハリムン国立公園の中に広がる見事な棚田。のどかな風景に見えるが、ここに暮らす人びとは、林業会社による開発や政府の理不尽な施策と戦いながら、自分たちの村を守り育てている。



都会のなかに共同体をつくり、ともに暮らす

— まっぼ 麻浦生協を中心とした住民たちの取組み —

麻浦生協は、たんなる生協活動の組織ではない。惣菜店、自動車修理センター、FM放送局、託児所、学童施設、そして学校までもつ地域の「共同体」である。それらは地域住民が自分たちの暮らしに必要なと感じてつくっていったもの。私たちは彼らの暮らす「まち」を歩き話を聞きながら、そこにあるESDの姿を見た。

❁ 発火点は共働きの母親たち 30名

10年ほど前、30名の若い母親たちの思いが始まりだった。就学前の子ども1~2人をもつ共働き家庭。仕事をもつ彼女たちは、地域社会とのつながりが希薄だった。そこで、教師とともに子どもを育てていきたいという思いをもち、みんなで出資して組合をつくって教師を招き、「共同育児・子どもの家」を始める。そこは親同士のコミュニケーションの場、仕事から帰ってきてホッとする、まさに家族のような場となったようだ。

その後、就学後の子どもの放課後の居場所「夢の場」もでき、組合員だけでなく地域の誰もが過ごせる場となる。そして、子どもが暮らしやすい環境は地域全体でつくっていかうという考えのもと、2001年に「麻浦ドゥレ(=助け合い)生協」は生まれた。



ソンミ山。気持ちのよい雑木林を登ると、眺めのよい山頂。そこは開発業者が一夜にして2000本の樹木を伐採してしまった成れの果ての姿。その日から交代で見張りをした反対運動のテントが今も残る。

❁ 市の開発計画反対で熟年層とつながった

地域との強いつながりをつくるきっかけとなったのは、ソンミ山^{サン}開発計画だった。ソンミ山とは、麻浦の住宅地に隣接する雑木林の小高い丘。子どもたちの遊び場、地域の年配者たちが過ごす場だった。

しかし、ソウル市と麻浦区は住民の水需要を見込み、ここに水槽を埋めて排水池にしよう計画する。疑問に思った若い組合員たちと地域の熟年層がともに立ち上がり、実際には必要ないことを自らの手で実証。建設を中断させた。その後、そのエネルギーは地域づくり向けられ、生協は売り場を設けるとともに、組合員は1100世帯に急増。地域の住民自身による、暮らしやすいまちづくりが一気に広まったのである。

❁ 父母、教師、地域住民がともにつくる私立学校

閑静な住宅地を歩くと、建設中の建物があった。ここが「ソンミ山学校」。小中高12年制の「国立」学校である。

受験戦争下にある韓国の画一的で一方的な教育に対し、未来の見える、地域の住民が支える学校をつくろうと1年前に開校した。ここではまちのできごと教育課程。地域の大人が教師となり、現在70名の子どもが学ぶ。いままでは校舎はなく、留守中の家や空き家を借りながら授業をしていたが、住民と父母が資金を出し合い財団(基金)をつくり、校舎を建設した。210坪の敷地に5階建て。建設費35億ウォン(約3億9千万円)は、なんとすべて自己資金だ。放課後の空き教室やメディア室は、地域住民のための場ともなる。

現在の課題は、質の高い教育を子どもたちに受けさせるための教師の確保という。父母や住民が選んだ教師は、常勤12名、科目別に40名、アドバイザー(地域住民や専門家)30名。彼らは一方的に教室の中で教えるだけではなく、まちに



ソンミ山学校。国産材利用で、教室はすべてオンドル暖房!各教室のほか音楽室、メディア室、食堂などがある。中庭はあるが、ソンミ山や河川敷の公園が子どもたちの運動場だ。(写真提供:ソンミ山学校)

出て、子どもたちが自ら学習能力を身につけるような教育を心がける。そのためには、教師にきちんと給料を支払い、財政的に支援しなければならないが、父母の負担は増えるばかり。そこが一番の問題だそうだ。

ソンミ山学校では、正規の教育課程だけが学歴とは考えていない。国で一律に定められた学習内容に縛られてしまっは、地域で学校をつくった意味がないと考える。子どもたちに必要な教育とは何かを本気で考えるからこそ、カリキュラムも校舎も教師も、父母と地域が自前でまかなおうと決意するのだ。

* * *

ソウル市麻浦区は、市の中心部にほど近い都会。環境が悪く、人間関係もドライなのが都会の常だ。しかし、住民はその土地を捨てることはできない。少しでも環境や人間関係をよくして暮らしていこうとする人たちの思いと行動が、麻浦生協という共同体をつくり、連帯を深めてきた。すべては日々の暮らしのため。ESDはそこから始まっていることを強く感じた。

(情報共有プロジェクトチーム:河村久美)



参加型地図づくりで村の暮らしを守る

— NGO と住民が取り組む自然保全を目的とした村づくり —

● ジャワ島東部の国立公園の中の村

私たちが訪れた場所は、グヌン・ハリムン国立公園内にあるマラサリ村ニュンチュン地区。ジャワ島西部の都市ボゴールにある環境NGO、RMI(インドネシア森林・環境研究所)のスタッフであるアンドリーさんが、彼らの活動サイトへ案内してくれた。

マラサリ村はボゴールから車で3時間のところにある山間の静かな村である。その昔、コーヒーのプランテーションで働いていた労働者が入り込み、険しい山を切り拓き、すばらしい棚田の村をつくったのだ。以来彼らは山を「手をつけず、ありのままの森を残すゾーン」「食べ物や油などを栽培・採集するゾーン」「田畑を耕し、人びとが暮らすゾーン」に分け、慣習に従って管理しながら生活していた。

しかし彼らの知らないうちに、山は国によって国立公園に指定され、彼らがそこで暮らすことが違法となってしまった。さらに、1970年代には国営の林業公社は一部の山を林業区域と指定し、住民が入ることを禁じ、木を伐採し、松を植え始めたのである。現在は国立公園、林業公社、鉱山採掘公社、そして住民の暮らすエリアがオーバーラップし、とても不安定な状態であるという。

● 自然保全を目的とした村づくり (KDTK) がスタート

このような背景のもと、2003年に、森で果実を採集していた女性を林業公社の職員が威嚇射撃するという事件が起こった。住民の緊張が一気に高まったそのとき、RMIがこの地域に入り、住民たちが林業公社に立ち向かうことのできるグループづくりを支援したのである。

RMIのKDTKは、住民の能力を高め、責任をもった森林管理ができるようにすることと、住民と政府の対話の場づくりをめざしたプログラムである。RMIの支援のもと、



◀ 見渡す限り山の斜面には、バナナやジャックフルーツなどの実のなる木や砂糖ヤシ、その根元には薬になる草や低木が生えている。日本の「いぐね」=屋敷林に通じるものを感じた。

↳ 夕食後、多くの村人が集まり、膝を交えて意見交換。住民たちはみんな真剣なまなざしで自分の地域の問題を訴える。意見交換の場は夜遅くまで続いた。



村人は約20人ごとにグループを構成(現在は男性3グループ・女性4グループ)し、そのなかで話し合いを重ね、相互に助け合いながら、以下で紹介する参加型地図づくりをベースに、未利用地の有効利用や農作物の商品化、有機農業、森林の保全管理などに取り組んでいる。

● GPS を使った参加型地図づくり

参加型地図づくりは、住民自身がGPS(衛星利用の測位システム)を持って山に入り、自分たちで土地の境界や利用方法をマッピングし、土地にかかわるさまざまな問題を解決する力を住民自身が身につけるためのプログラムだ。最初に紹介した伝統的な土地利用の状況や、水場、畑など地域にある資源をプロットしていく。できあがった地図はかなり精度が高く、その下には住民が名前を書き込む欄があり、みんな誇らしげにサインをしている。

この地図づくりによって、住民たちは自

分たちの山の状況を理解し、どういうふう
に土地を利用していきたいのかを自分
たちで取り決めることができるようになった。
さらに、この地図は土地利用に関する政府
との交渉を可能にした。住民側に交渉のた
めの道具や知識が備わったことで、政府に
対しての発言力を増していったのである。

* * *

私たちが訪問した夜に開かれた住民の
方々との交流会では、「松の植林で衰えた
土をどうすれば蘇らせることができるの
か?」「ドリアンを商品化するいい知恵は
ないか?」「日本の国立公園ではインドネ
シアのような問題は起こっていないのか?」
といった熱心な質問が浴びせられた。日
本で有機農業や農産加工品の開発に取
り組む人たちとマラサリ村の人びとが、
直接交流し、互いに学び合える場をつ
くりたい。村を後にした訪問メンバー
は、RMIのスタッフとそんなことを話
し合った。

(仙台いぐね研究会:福澤隼人)

地域の動き

ESD-北信越 地域ブロックミーティング

開催
間近!

公開討論会とワークショップ

ESD-J地域ネットワークプロジェクトチーム(地域PT)では、環境省がESD推進事業の一環として行う地域セミナーを受託し、東海地域と北信越地域でブロックミーティングの企画・準備をすすめてきました。北信越地域では、実行委員会を立ち上げ、12月23日、「ESD-北信越 地域ブロックミーティング in 富山～手をつなごう!風をおこそう!～」を開催します。先進的にESDに取り組む岡山での活動事例紹介のあと、長野県・石川県・富山県から福祉、地域づくり、国際、子ども、環境分野でそれぞれに活躍しているゲストをお迎えし、公開討論会、そして参加者によるESDへの道づくりワークショップを行います。

企画、実施に携わる実行委員は、環境、福祉、国際などにかかわるNPO、教員、学生、行政関係者、議員、研究者など多

分野にわたっています。北信越地域のネットワーク組織として、知恵を出し合う創造の場を提供し、「未来をつくる教育」をかたちづくる試みに、日本のさまざまな地域や世界の人々とともに取り組んでいきます。

実行委員会で議論された「10年後の着地点」

実行委員会では、まず、最初に「この10年で私たちは何がどう変わることをめざして活動を展開するのか」「今回の企画をどう位置づけるのか」について参加型会議で徹底討論をしました。さまざまなバックボーンをもつメンバーとの議論のなかで各々がESDに対する理解を深め重要性を感じていきました。そして私たちの「ESDの10年計画図」ができあがりました。10年後には「ESDを実践するための仕組みが地域社会の中に生まれ始めている」。そんな着地点をイメージしています。このイメージを育てつつ実現のための手段を考

え実践していきます。では、今、第一歩として何をするのか。それが、<手をつなごう!風をおこそう!>です。多分野で活動する市民が「ESD=未来をつくる教育」を合言葉にもう一つの学びの場づくりにむけて、手をつなぎ新しい風をおこすのです。

共通の目標をめざす過程に多様な人がかかわることで豊かな学びの場が形成され、行動に結びつき継続的な活動になっていく——この企画をすすめるなかでもESDの実践が始まっています。みなさんも、ぜひごいっしょに。お問い合わせは、ESD-北信越ブロックミーティング実行委員会 担当竹中 (TEL:090-3155-3529 (19時以降)、FAX:0766-24-1473、E-mail: esd_h2005@yahoo.co.jp) まで。

伊藤 通子 (いとう みちこ)

地域PTメンバー。富山県在住。開発教育のグループ「とやま国際理解教育研究会」事務局長。県内の技術者らと立ち上げたエコテクノロジー研究会では、科学技術の側面から環境教育を推進。

国際的な動き

アジア太平洋地域のESD推進ネット

前号でご案内したとおり、9月24～25日に、ESD-J国際ネットワークプロジェクトチーム(国際PT)が中心となり、アジア太平洋地域(AP地域)のESD推進にかかわる実務者間での戦略会議が開かれました。今回は、その成果をお伝えし、今後積極的に情報交流する海外ゲスト(団体)について紹介しましょう。

アジア各国からの参加者は9名。第一セッションでは、3グループに分かれてAP地域におけるESD推進のためのネットワークの意義と目的について話し合い、内容を整理しました。翌日の第二セッションでは、具体的な行動に移すために下記の4点が合意されました。

- ・ アジア太平洋地域のESD推進のためのネットワーク(ESD-AP)を形成する。
- ・ 準備委員会を設置する。(当面は戦略会議出席者で構成)
- ・ 暫定的な事務局をESD-Jが担当する。
- ・ 1年後をメドに次回会合を開催する。

これにより、国際PTでは、準備委員会メンバーリストを作成し、ESD-APの幹事を依頼するなどの実務に入っております。

次に、今回ESD-Jが招待した海外ゲストを紹介しましょう。

中国 自然の友 李浩さん <http://www.fon.org.cn>

市民の環境への関心を高め、中国における環境保護と持続可能な開発を促進することをミッションに掲げる環境NGOです。最近の活動では、内モンゴル自治区をはじめ中国西部の農村そして都市部へ車で巡回し、独自の教材と専門知識をもったボランティアが環境教育プログラムを実施する「環境教育バン・移動プロジェクト」が特徴的です。担当者の李さんは、日本での熱い戦略会議に刺激され、現在、中国でのESDネットワークの立ち上げに奔走しています。

タイ タイ環境研究所 Ampai Harakunarak さん
<http://www.tei.or.th/main.htm>

タイの草分けの環境NGO。1997年から開始しているエネルギー環境教育プログラム「Dawn Project」では、タイ全土にわたる600の学校と地域を巻き込み、学校の省エネ10%削減という成果をあげています。しかし、「体系的なアプローチが欠けている」とのこと。環境教育やトレーニング、情報サービスを長年にわたり提供している専門家集団ならではの冷静な自己分析です。

「DESD日本実施計画」 策定に向けた提言づくり

DESD 日本実施計画最前線

「DESD 国際実施計画」が採択された

ユネスコが策定をすすめてきた「DESD 国際実施計画」が、2005年9月のユネスコ第172回理事会で採択された。これを受けて、DESDの主提案国である日本政府も、2005年度内をメドに、日本としての推進体制と実施計画の策定を急ピッチにすすめると思われる。そこで、ESD-Jとしては、2004年6月2日に続いて、本件では2度目となるDESDに関する小泉首相への要望書（政府への政策提言）を提出することなどにより、多くのNPOや市民・企業などの声（民意）が、日本実施計画策定に活かされるように、働きかけをさらに強めていきたい。

「DESD日本実施計画」策定に向けて

ESD-Jでは、日本実施計画策定に向けて、

①推進体制、②策定のプロセス、③計画内容、の視点から政策提言を行っている。

① **推進体制**については、内閣府に本部を置き、内閣総理大臣を本部長に、教育関係者・NPO・産業界などからのステークホルダーが参画する円卓会議（官民による推進体制）の設置を求めている。

② **策定のプロセス**については、前述の円卓会議のもと、さまざまなステークホルダーが参画・協働できるオープンなワーキンググループによって策定していくことを求めている。

③ **計画内容**については、既存の各種取り組みや施策のなかに「持続可能性に配慮する」視点を取り入れ、わが国がすすめている構造改革路線に沿った元気な日本の創生がESDによっても促進され、そのなかで持続可能な社会の構築、国際的な社会貢献がなされていくことをめざした内容を盛り込むことを求めている。

ESDをあらゆる教育・学習に組み込むために

DESD国際実施計画には、「DESDの全体を貫く目標は、持続可能な開発の原則、価値観、実践を、教育と学習のあらゆる側面に組み込むことである。この教育における取り組みによって、行動の変化が促され、環境を損なわず、経済的にも成り立ち、現在そして未来の世代にとっても公平な社会であるという、より持続可能な未来が創造されるだろう」とある。この大目標の達成に向けた政策を、ESD-Jとしてはこれからも提言していきたい。今後とも、ぜひみなさんからの提言をESD-Jにお寄せいただきたい。

* DESD(ディーイーエスディー)とは、Decade of Education for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育の10年=ESDの10年)の略語です。

池田 満之 (いけだ みつゆき)

ESD-J副代表理事(政策提言PTリーダー兼)・岡山ユネスコ協会理事・旭川流域ネットワーク世話人・(株)環境アセスメントセンター西日本事業部代表取締役など。

トワーク「ESD - AP」設立に向けてスタート!

フィリピン フィリピン持続可能な開発協議会
環境放送サークル
(Elizabeth C. Roxas さん)

<http://www.ebc.org.ph/main.html>

リオサミット直後に政府が立ち上げた同協議会の共同議長を務めるElizabethさんは、環境放送サークルの代表としてメディアを活用して誰でもが簡単に理解できる教材づくりを手がけています。戦略会議後の国際シンポジウムでも、歌と画像でメッセージを伝える作品を紹介してくれました。

紙幅の都合で、すべての参加団体を紹介できませんが、参加団体によるネットワークができました(右図)。私たちのアジアの仲間として、今後ともしっかりつながっていきましょう。

大島 順子 (おおしま じゅんこ)

ESD-J国際PTリーダー。2000年より沖縄県国頭村において地域の自立を促し地域住民が主体となる村づくりの支援にあたり、地域資源を持続可能に活用していくツーリズムの構築のための組織と人づくりに従事。琉球大学観光科学科勤務。



「木づかい運動」をESDに活用しよう

▼京都議定書の目標達成に、国産材の利用を

平成17年2月に地球温暖化防止のための京都議定書が発効しました。このなかで日本は、二酸化炭素などの温室効果ガスの6%削減を国際公約として世界に約束しています。そして、その3分の2にあたる3.9%は国内の森林による二酸化炭素の吸収量により確保することとされています。ただし、この吸収量の算定の対象となるのは、間伐などが適切に行われているような森林経営や管理のなされている森林に限られています。

これを円滑にすすめ、京都議定書の目標を達成しようと思えば、国産材の利用量が毎年2,500万m³必要なのですが、昨年の国産材の利用量の実績は残念ながら約1,700万m³にとどまっているのが現状、これでは森林整備に必要な資金を森へ還流していくことが不十分となってしまいます。



愛知県の小学校での授業風景

▼学習プログラム開発や旅費・謝金に活用可

そこで、林野庁では今年から「木づかい運動」を展開し（詳細は、<http://www.jawic.or.jp/>をご覧ください）、地域材の積極的な利用に向けた普及啓発に努めております。教育分野においても、木材利用に関する環境教育の充実を図るため、

① NPO、木材業者、地方自治体などによるネットワークの構築

② 学校教育や社会教育の場における木材教育活動の実践などに対する支援

を行っています（強い林業・木材産業づくり交付金のうち、「暮らしの中の地域材利用活性化推進」メニューで対応。学習プログラムの開発や準備・実施のための旅費や謝金、テキスト作成費などに活用いただけます）。

たとえば、愛知県においては、本交付金を活用して小学校の総合学習における木材教育に取り組んでおり、地元の木材業界・NPO・教育関係者・地元行政機関などが協力して座学や体験などの授業を実施しています。

林野庁といたしましては、このメニューはESDにも資するものと明確に位置づけており、今後こうした取組みが拡大していくことを大いに期待していますので、ご関心のある方は、林野庁木材課または各都道府県の木材担当部局までお問い合わせください。

（問い合わせ：林野庁木材課需要開発班 小林・梁瀬 03-3591-5794）

ESDに期待します！

損保ジャパン環境財団 富沢 泰夫

持続可能な環境、平和で安定した社会の実現には、「人」がいかに英知を結集し、行動するかが重要です。「人」は複雑多様な可能性をもつことから、当財団では「木を植えるより、人を育てる」をモットーに、「CSOラーニング制度」(*)を実施しています。

この制度では、大学生が環境NPOで長期インターンをし、環境問題、NPOの社会的意義、市民社会のあり方を考えることをめざしています。機会や場さえあれば、人間の力はいくらかでも引き出されることを実感しています。

今後、持続可能な社会づくりに向け、市民一人ひとりの参画、そして、NPOの役割はますます重要になってまいります。ESD-Jの活動に期待しております。

* CSO (Civil Society Organization: 市民社会組織) ラーニング制度については、右記 URL をご参照ください。 <http://www.sjef.org/internship/>



富沢 泰夫 (とみざわ やすお)

1953年東京生まれ。78年東京大学法学部卒。同年、安田火災に入社。99年同社地球環境部課長。02年損保ジャパン環境財団事務局長（出向）。03年損保ジャパン記念財団事務局長を兼務し現在に至る。

私がESD-Jに入ったわけ

持続可能性を合言葉に
大学の内と外をつなぐ

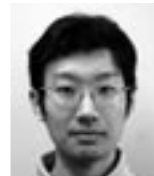
AGS-UTSC サステナビリティ教育ワーキンググループ 玉井 暁大

東京大学という大学一つをとっても持続可能性（サステナビリティ）の教育に興味をもつ人・研究する人は分散しており、互いのことをまったく知らないケースが多々あります。そこで、散在する関連研究を行う人や、サステナビリティ教育に興味をもつ人が多様な分野から集まり、意見・情報を交換し、議論する場になることを最大の目的として、昨年このワーキンググループが設立されました。

新たな視点や考え方を得たり生み出したりする一つの場となると同時に、一つの点として内外のさまざまな立場の人びとの動きとつながるリンクとなることをめざしています。ESD-Jの活動を通じて、さらに他の主体で取り組んでいる人びととの交流と学びを深め、発信を行っていただければと考えています。

玉井 暁大 (たまい あきひろ)

東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻修士課程に在籍。大阪府立大学理学系研究科修士号取得。大学における環境教育を研究テーマとしている。



ESDを 知ろう



UNESCO ESD マスコット「DDくん」

自然エネルギー

たとえば、太陽光発電。太陽エネルギーは半永久的に利用でき、自家発電のような分散型の利用形態に向いている。このような特徴は、環境の改善はもちろん、貧困層への供給可能性・資源争いの回避、地域の自立などの点で持続可能な開発に向けて重要である。これはヨハネスブルグサミットの流れをくむ「自然エネルギー国際会議」(2004年、ドイツのボンで開催)でも確認された。自然エネルギーには、ほかにも風力、水力、バイオマス、地熱などがあげられる。一方「新エネルギー」は、石油代替としての意味が強く、従来型エネルギーの新利用形態なども含まれる。(野田恵)

ESD 基本用語集 vol.6

ESD を読み解くためのキーワード。
こんな言葉も実は ESD につなが
っているのです。

批判的思考 (クリティカル・シンキング)

批判的に考える思考法のことを指し、物事を無批判に受け入れる(鵜呑みにする)のではなく、先入観を含め、情報源の信頼性や推論過程の論理の一貫性、検証可能な事実と価値の区別など、自己省察を伴う論理的、分析的、合理的思考を特徴とする。批判的思考は、たとえば、複雑な制度的・社会文化的関係のなかで、持続不可能な開発を支える真の原因はなにか。問題の原因を探索したり、問題解決に取り組む過程で、常に求められる思考法(態度・知識・技能)だといえる。(小栗有子)

人間の安全保障

国連開発計画 (UNDP) 『人間開発報告 1994』で「人間の安全保障」という言葉が使われて以来、従来型の「国家の安全保障」ではもはや人びとの安全は守られないことが認識されるようになった。「平和のうちに生きる権利」をもとに、人間個人の安全を、軍事力によってではなく、「生命の権利」「恐怖と欠乏からの自由」など人道の観点から予防的に捉えているのが特徴である。病気や飢餓・貧困、失業、犯罪、政治的弾圧、環境災害、環境汚染、人権侵害などは、途上国の人びとのみならず私たちの誰もが巻き込まれる可能性があるのだ。(上條直美)

ESD 関連の本

シチズン・リテラシー 社会をよりよくするために私たちにできること

鈴木崇弘氏ほか編著、教育出版発行

日本は、社会、民主主義、市民の役割割りについて学ぶ機会が少なく、政治や政策、法律が身近に感じられない社会です。真の民主主義を担う市民が学ぶことは多いのです。他人まかせでは、無関心、無感動、活力の低下を招き社会の力そのものが低下していきます。本書は市民教育のテキストです。市民を多角的な視点から定義し、経済・財政システム、政治システム、司法システムを具体的な事例から概観することで、NPO や NGO の意味を考え、地域や国際的なつながりを学び、私たち自らが行動するためのヒントが豊富に提示されています。(相星素子)

● A5 判 216 頁、1,995 円 (税込)、2005 年 3 月

● 購入方法：全国の一般書店へ



絵本 ちいさなやま

小林豊作・絵、ポプラ社発行

地域開発のなかで、ぼつんと残された「たろうやま」——。この絵本は、東京都足立区北千住に実在した場所がモデルに描かれました。夜明の風景、日中そこで野菜づくりをするおじいさんの姿、のんびりとした夏の長い昼、土のにおい、風の動き、そこに動植物、学校からのんびりと遊びながら帰ってくる子どもたち、「ごはんだよー」と子どもを呼ぶお母さんの声、「たろうやま」の向こうに広がるビルの群れ。地域や今の生活のなかで、消えゆくもの、残したいものについて考えさせられる絵本です。(野口扶弥子)

● A4 変形判、32 頁、1,260 円 (税込)、2001 年 9 月

● 購入方法：全国の一般書店へ

ESD-J だより

世界中の人びとが今も将来も安心して暮らせる社会をつくるには、市民の参加やさまざまな主体の連携のもと、施策や活動をつなぐことが求められます。こうした「持続可能な社会」の実現には、「人づくり＝教育」が重要です。ESD-Jは、日本の政府とNGOがヨハネスブルグサミットで共同提案した「国連持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」をすすめる民間のネットワーク団体として発足しました。持続可能な社会づくりや教育の分野で活動している団体や個人が参加し、政策提言、情報共有、国内のESD推進ネットワークづくり、国際ネットワークづくりを行っています。みなさまのご参加をお待ちしています。

2005 年秋の活動報告

9月3日 ESD 地域ミーティング in 板橋を共催

板橋区で開催の「ともに創る未来のための連続フォーラム」の一環として、NPO 法人ボランティア・市民活動推進センターいいたばしとともに開催しました。

9月7日 2005 衆議院総選挙に向けた緊急アピール

選挙の争点に、今後の社会のあり方を考えるうえで欠くことのできない「環境」や「持続可能性」の視点があまりにも弱いことに危機感を覚え、34の賛同団体とともに、緊急アピールを各政党・新聞各社に提出しました。

9月10日 2005 年度第3 回理事会の開催

12月中旬発行予定のESDキックオフブック、アジアESD国際シンポジウムおよび戦略ワークショップ、ESD地域ミーティング・地域ブロックミーティングなどのすすめ方についての議論をしました。

9月22～25日 ESD 国際会議・シンポジウムを開催

ESDの推進に向け、理論や実践についての情報交換や連携について議論する国際会議を、立教大学東アジア地域環境問題研究所などととも開催し、そのなかで、ESDアジアネットワーク構築に向けた戦略ワークショップを実施。また、25日にはシンポジウムを主催。ワークショップの成果である、ESD-APの立ち上げを宣言しました。

10月14日・11月10日・12月6日 ESD 連続セミナーを共催

環境以外の分野の教育活動を知り、環境教育との接点や学び合える点を探る連続セミナーを、環境パートナーシップオフィス(EPO)、地球環境パートナーシッププラザ(GEIC)などととも開催しました。第一回「環境と開発」、第二回「環境と福祉」、第三回「環境と人権」。

10月21～22日 ESD 地域ミーティング in 岩手を共催

市民の取組みと大学の教育が共鳴し合う関係をつくることをめざし、「持続可能な地域社会の実現をめざして」をテーマに、国立大学法人岩手大学、NPO 法人環境パートナーシップいわてとともに開催しました。

10月22日・11月23日 連続フォーラム「地球市民大学校 環境 NGO と市民の集い」の企画協力

独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金主催の、三回連続フォーラムを開催中。第一回は、全国青年環境連盟(エコリーグ)と、第二回は、国際青年環境 NGO A SEED JAPAN とともに企画運営にかかりました。

10月29～30日 おかやまESD国際ワークショップを共催

「フォーマル教育とノンフォーマル教育が協働するために」をテーマに開催、ESD-Jからは阿部・池田・大島の各理事がメンバーとして参加しました。主催:(NPO法人)岡山県国際団体協議会。

11月18日 PTリーダー会議を開催

ESD 地域ミーティング・ブロックミーティングのすすめ方、ESDの10年日本実施計画への提言、国際会議の報告とESD-APの取組み案などについて話し合いました。

団体正会員

- (財)アジア・太平洋人権情報センター(ヒューライツ大阪)
- (財)アジア女性交流・研究フォーラム
- (財)オイスカ
- (財)キープ協会
- (財)京都ユースホステル協会
- (財)グリーンクロスジャパン
- (財)日本自然保護協会
- (財)日本野鳥の会
- (財)日本ユニセフ協会
- (財)日本YMCA同盟
- (財)ボーイスカウト日本連盟
- (財)野外教育研究財団
- (財)ユネスコ・アジア文化センター
- (財)ガールスカウト日本連盟
- (財)日本環境教育フォーラム
- (財)日本ネイチャーゲーム協会
- (財)日本ユネスコ協会連盟
- (財)農山漁村文化協会
- (財)部落解放・人権研究所
- 国立学校法人 筑波大学 農林技術センター
- 学校法人 日本自然環境専門学校
- NPO 法人 岩山自然学校
- NPO 法人 ADP 委員会
- NPO 法人 エコ・コミュニケーションセンター (ECOM)
- NPO 法人 ECOPLUS
- NPO 法人 えひめグローバルネットワーク
- NPO 法人 開発教育協会
- NPO 法人 ガラ紡愛好会
- NPO 法人 環境市民
- NPO 法人 環境文化のための対話研究所
- NPO 法人 キーパーソン 21
- NPO 法人 くすの木自然館
- NPO 法人 グリーンウッド自然体験教育センター
- NPO 法人 グローバル・スクール・プロジェクト (GSP)
- NPO 法人 国際自然大学校
- NPO 法人 コミネット協会
- NPO 法人 サイカチネイチャークラブ
- NPO 法人 自然体験活動推進協議会
- NPO 法人 持続可能な社会をつくる元気ネット
- NPO 法人 人権 NPO ダッシュ
- NPO 法人 生態教育センター
- NPO 法人 タブラ ラサ
- NPO 法人 地球環境と大気汚染を考える全国市民会議 (CASA)
- NPO 法人 地球の未来
- NPO 法人 D&D 夢と多様性
- NPO 法人 個別エコロジカルコミュニティー
- NPO 法人 ドングリの会
- NPO 法人 ほととねと
- NPO 法人 ボランティア・市民活動学習推進センターいいたばし
- NPO 法人 やまぼうし自然学校
- Earth Guardian 倶楽部
- アースビジョン組織委員会
- ESD 未来教育研究会
- エコテクノロジー研究会
- エコプラットフォーム東海
- 岡山市役所(東京事務所)
- 岡山ユネスコ協会
- OAK HILLS (オークヒルズ)
- オーシャンファミリー海洋自然体験センター
- 環境 NGO アジア環境連帯
- 環境・国際研究会
- くりこま高原自然学校
- サステイナブル・コミュニティ研究所
- 「持続可能な社会と教育」研究会
- 森林たくみ塾
- スリーヒルズ・アソシエイツ
- 世界女性会議岡山連絡会
- 全国学校給食協会
- 仙台いぐね研究会
- 創価学会平和委員会
- 地球環境・女性連絡会 (GENKI)
- 地球環境を守る会「リーフ」
- 地球市民教育総合研究所
- TVE ジャパン
- 帝塚山学院大学国際理解研究所
- とやま国際理解教育研究会
- 日本アウトドアネットワーク
- 日本環境ジャーナリストの会
- 日本ホリスティック教育協会
- ハーグ平和アピール平和教育地球キャンペーン
- 東アジア地域環境問題研究所
- ホールアース自然学校
- (財)木文化研究所
- (財)バースセンス研究所
- (財)プラス・サーキュレーションジャパン
- (財)現代文化研究所

お知らせ

地域ブロックミーティング (4 ページ参照)

■ ESD- 東海キックオフミーティング もっと知りたい! もっと未来へ!

日時 2005 年 12 月 18 日 (日) 場所 新東通信(株)会議室(名古屋)

連絡先 担当 成清(なりきよ) ept@ept.jp

■ ESD - 北信越 地域ブロックミーティング in 富山～手をつなごう! 風をおこそう!

日時 2005 年 12 月 23 日 (祝) 場所 富山県総合福祉会館 サンジップとやま(富山)

連絡先 ESD-北信越ブロックミーティング実行委員会 担当 竹中 esd_h2005@yahoo.co.jp

地域ミーティング

- ESD 地域ミーティングが、筑波(茨城)、泉北(大阪)、秋田、日野(東京)、旭川(北海道)、松戸(千葉)で2006年1～2月に開催予定。詳細はESD-J事務局まで。



情報共有プロジェクトチームでは、先日ボランティア作業スタッフ募集の案内をMLに流しました。政府への提言や国際ネットワークづくりなど、外に向けての華々しい活動と並行して、会員の相互理解をすすめる内に向けての活動も重要です。関心のある方は事務局までご連絡を。(伊藤伸介)

特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)

URL <http://www.esd-j.org/> e-mail: admin@esd-j.org

〒160-0022 東京都新宿区新宿5-10-15 ツインズ新宿ビル4F (社) 日本環境教育フォーラム内

TEL: 03-3350-8580 FAX: 03-3350-7818

● 会員募集中: 正会員 (10,000 円)、準会員 (3,000 円) 詳しくは HP をご覧ください ●

